

校内授業研究会への支援の在り方

—要請訪問研修の事例を通して—

井川久美子

近年、校内研修を活性化させる一つの手立てとして、ワークショップ型を取り入れた授業研究会が盛んに行われている。

本研究所の要請訪問研修の一つの「参加型授業研究会」の成果と課題をもとに、先行の研究も加味しながら、ワークショップ型による校内授業研究会への支援について考察した。具体的には、研究協力校で、授業研究会を研究主任とともに企画し、実践に参加する中で、どのような支援が実際には必要なのかを考えた。DVDを使った模擬体験を取り入れるなど、より身近に研修内容が感じられるような手立てが必要であることや、学校の実態に合った資料・情報提供の有効性が認められた。

〈キーワード〉 校内授業研究会、要請訪問研修、ワークショップ型、研究主任

I 主題設定の理由

校内授業研究会は、今までの形では、授業者の指導方法が話題の中心になることが多かった。また、実施した授業の教科を専門とする教員の発言がほとんどを占め、参加者全員が議論に参加しているとは言えなかった。

発言を促し、話し合いを活性化させるために取り入れられたのが、ワークショップである。ワークショップを取り入れた（＝ワークショップ型）授業研究会では、参加者一人ひとりの発言の機会が増えるだけでなく、参加者が話し合いの成果を、各自の授業を見直すきっかけにすることができる。また、お互いの意見を聞き合い、話し合うことで、教職員全体の協働性が向上し、組織としての学校の教育力を高めるといふ成果が期待できる。

本研究所では、学校が抱える問題に対する要請訪問研修の充実を図っており、その一つとして、「ワークショップで進める参加型授業研究会」がある。その実践事例をもとに、学校現場での現状を分析し、授業研究会がより活性化するための方策を探りたいと考えた。また、研究協力校における研究会での実践を通して、授業研究会へのよりよい支援の在り方を考えたい。

II 研究の目標

要請訪問研修による実践やアンケート結果等から、成果と課題を分析する。また、研究協力校の校内授業研究会への支援を一つの事例として、どのようなことを学校側が必要としているかを考察し、よりよい支援につなげる。

III 研究の方法

1 ワorkshop型についての研究

ワークショップ型の特徴を、先行研究を追いながらまとめる。

2 他都道府県教育センターの事例分析

他都道府県教育センターの事例を収集し、訪問研修や学校支援について分析する。

3 訪問研修ユニット試行での成果と課題

訪問研修ユニットを試行し、成果と課題を分析し、考察する。

4 研究協力校での実践と分析

研究協力校でのワークショップ型授業研究会の在り方を、研究主任とともに探り、成果と課題を考察する。研究主任とのやりとりを通して、支援の在り方も考えていく。

IV 研究の内容

1 ワークショップ型についての研究

「知識基盤社会」という言葉をよく耳にする。平成17年の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」では、「知識基盤社会とは、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会」と定義されている。このめまぐるしく変化する社会に対応し、生き抜くには、学校で知識や技能を習得するだけではなく、その知識や技能を活用でき、社会で生き、働き、学び続ける力を児童生徒が身につけることが必要である。社会を生き抜く力を身につけさせ、学力の向上を目指すには、教員の資質の向上が欠かせない。

教員に求められている資質・能力とは、「高度な専門性と社会性、実践的指導力、チームで対応する力」「創造的、協働的な学び、コミュニケーション型の学びに対応する力」である。これらは、本来、校内での実践の中、お互いの学び合いを通して培われていくべきである。しかし、学校現場をめぐる問題の多様化、その解決に向かう教師の多忙化により、学校の「学びの場」としての機能が働かなくなっている現状では、それらの力を培うことは難しい。その上、今後10年間で、教員全体の約3分の1が入れ替わることで、現場の実践の中での伝承がうまくいかなくなると危ぶむ声もある。

児童生徒の学ぶ意欲を高めるためにも、自身の資質・能力の向上のためにも、教師は自発的に学び続ける姿勢が求められている。学校にも、「学びの場」として機能し続けることが求められる中、教員の校内研修を活性化させる様々な手段が講じられている。

その手段の一つが、ワークショップ型である。平成23年1月に出された「教職生活の全体を通じた総合的な向上方策について」(審議経過報告)では、教員の要請や研修においても、「一斉指導による学びからワークショップ型の協働的な学習への転換」が提案されている。

(1) 従来型の授業研究会

従来型の授業研究会と言えば、大人数が参加し、長机が口の字に並んだ会場で、「何か意見はありますか」と司会が声を張り上げるという光景が目につく。しかし、この形態では、意見を出してもらって、最後にまとめようと思うとあまりうまくいかず、「何のために行ったのか」と愕然とすることも少なくなかった。

本研究所で行われている「ミドルステップアップ研修」の参加者や、要請訪問研修で訪れた学校から提出されたアンケートを分析すると、従来型の研究会の問題点として、二つの「壁」が浮かぶ。

一つ目は、話し合いにおける「心理の壁」である。従来の研究会では大変堅苦しい雰囲気が漂い、話しづらいことが多い。その雰囲気は口の字型の座席配置も関係している。人数が多くなると、向かいの人との距離が2～3mになる。この距離は、心理学者のエドワード・ホルの分析に照らし合わせると、「社会的距離」(120～360cm)にあたり、会議のための距離とされている。自分の意見をざっくりと話せるといった距離ではない。ちょん(2009)は、「この距離感を埋めて活発な議論や親和性を獲得するのは、プロのファシリテーターであっても至難の技です」と記している。

心理的な距離の壁がある上に、社会的な手抜き(リンゲルマン効果)が起きてくることも知られている。大勢の人がいれば、人は萎縮してしまい、意見があっても発言しようという勇気が出ない。その上、「自分が言わなくてもきっと誰かが言ってくれる」と思ってしまう。また、多数の意見を期待しても、一度に一人しか発言できないので、意見がある人がいても、主張の強い人にゆずってしまう。

二つ目は「教科の壁」である。教科担任制がとられている中学校や高等学校では、教科の専門性に偏った話題になることが多く、閉じられた集団の中での討議になる傾向がある。授業者の手立てや発問に話題が集中し、専門外だと感じる参加者は、疎外感を感じざるを得ない。また、意見があっても、「これを言うてしまうとばかにされるのではないか」とか、「言っても取り上げられないのではないか」とかいう気持ちが働き、発言できなくなってしまうこともある。

意見を求める発散型の会議を求めるのであれば、大人数での従来型は向いていない。従来型が向いているのは、発言があまりいらぬ、情報共有や案件を通す場合なのである。

(2) ワークショップの特色

「ワークショップ」は、20世紀初頭、アメリカのハーバード大学で、J.P. ベイカーが担当していた戯曲創作の授業に起源をもつ。先生や講師から一方的に話を聞くだけではなく、参加者が主体的に議論に参加したり、体や心を使っての体験をしたりする。お互いに刺激し、学び合いを深める、グループによる学びのスタイルである。物づくりや音楽、演劇、各種体験セミナーなどに使われてきたが、近年、企業や行政分野でも行われるようになってきている。

ワークショップの特色を堀(2010)は五つに分けて整理している。一つ目は、「参加」。参加するメンバーが常に当事者意識をもちつつ、ワークショップをつくりあげる。4～6人の小グループでの活動なので、発言がしやすいし、自分の意見が大切にされているとすることができる。二つ目は、「体験」。メンバーがそれぞれの体験をもち寄り、活動を組み立てる。ワークショップを通して共通の体験をすることで、日常では得られない創造と学習を生み出している。三つ目は「協働」。対話という共同作業を通じて、活発な相互作用を起こすことで、ワークショップの幅が生まれる。四つ目は「創造」。一人では思いつかないことを発見したり、予想もしていない新しい何かを創ったりすることができる。五つ目は、「学習」。参加者同士の活発な話し合いの中で、一人では得られない気づきを獲得すると同時に大きな学びを培うことができるのである。

(3) 教育の分野でのワークショップ

教育の分野で、ワークショップの手法がさかんに使われるようになったのは、平成14年度から実施された「総合的な学習の時間」の存在が大きい。

文部科学省から平成20年6月に出された中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編では、「他者と協同して取り組む学習活動にすること」とされている。協同的に学ぶことが、多様な考えをもつ他者と適切に関わり合ったり、社会に参画したり貢献したりする資質や能力および態度の育成につながる。また、探究的な学習となり、生徒の学習の質を高めることにつながるとしている。

この協同的学びには、ワークショップが大変効果的であるとして、文部科学省も力を入れている。平成23年8月にコミュニケーション教育推進会議 審議経過報告として出された「子ども達のコミュニケーション能力を育むために～『話し合う・創る・表現する』ワークショップへの取組～」では、芸術家などを学校に派遣し、芸術表現体験活動を取り入れたワークショップ型の授業の取組みの成果として、①他者認識、自己認識の力の向上（「受け入れる力」の向上）②「伝える力」の向上 ③自己肯定感と自信の醸成 ④学習環境の改善を挙げている。

子どもたちの主体性や他者との関係性の構築を重視したワークショップ型の授業を実施することで、子どもたちの気づきや発案を誘引し、潜在的な能力や学習意欲を引き出す。教員にとっては通常の授業手法や評価方法を見直し、改善する機会になると報告している。

このような特色が認められ、総合的な学習の時間等で取り入れられていたワークショップの手法が、協働の作業を通して、話し合いを深め、チームワークを構築するというねらいにおいて、校内研修や各種会議にまさに必要だとされ、取り上げられてきていると考える。

今や全国各地の教育センターや教育研究所では、ワークショップを使った手法を研究し、学校現場への援助の在り方を探っている。そこで、他都道府県の事例収集と分析を行った。

2 他都道府県教育センターの事例分析

(1) 事例収集と分析

他都道府県の教育センター等のホームページ、送付されたリーフレット、出版物等をもとに事例を収集していった。

どのセンターも、「研究会とは形ばかりで、本音で語り合えない」「授業研究の仕組みが確立されていない」「活発な協議にならず、司会者の負担が大きい」などの現場の悩みをアンケートから吸い上げ、解決策としてワークショップ型を紹介している。

これらの取組みには三つの特色がある。

ア ホームページやリーフレット等での紹介

説明やワークシートの使い方などを、ハンドブック方式で提示。それぞれの学校でダウンロードし、工夫できるようにしてある。

イ 研修講座の中で紹介

年次研修、ブロック研修などのプログラムの一つとして実施している。

ウ 出前講座の一つとして運用

学校や研修会を訪問し、ワークショップ型授業研究について具体的な方法とその成果を紹介。模擬授業や実際の授業研究会での実践。

(例)

- 広島市教育センター
 - ・協議会を効果的に機能させる工夫について示したパンフレットを作成。パンフレットの内容を基に各校の協議会での支援を行う。
- 横浜市教育センター
 - ・「授業力向上の鍵」の出版。ワークショップ型授業研究の紹介やファシリテーター用シナリオ、各校の取組みを掲載している。
- 石川県教育センター
 - ・校内研修の活性化をサポートするために、学校教育に関する研修プログラムを提示。学校や地域の要望に応じた内容で講義・演習などを指導主事が実施している。
- 京都府総合教育センター
 - ・学校から提供された単元指導計画、授業案などをもとに、授業改善モデル「単元指導パッケージ」を開発。また、出前講座研修プログラムとして活用。ワークショップで学習指導体験を実施している。
- 三重県教育委員会事務局研修分野
 - ・ワークショップ型研修会を勧めるだけでなく、必要に応じて、研修会の企画・運営も行う。
 - ・ノウハウをDVDにまとめ、各校に配付。
 - ・教育力向上支援事業重点支援校の校内研修会を支援すると同時に、近隣学校の研修担当者への研究会を実施。

ホームページやリーフレット資料については、それぞれの学校の校内研修における資料として活用され、成果を上げている。学校の実態に応じた使い方ができるように大変工夫されており、使いやすい。また、指導主事が単に学校を訪問するのではなく、それぞれの学校の要望に応じた校内研修を行っているセンターも増えており、きめ細やかな支援と充実した研修の内容を目指していることがわかる。

3 訪問研修ユニット試行での成果と課題

本研究所では、平成21年度から訪問研修ユニットの充実に取り組んでいる。訪問研修ユニットとは、学校や研修会に訪問したときに使うツールである。教育現場のニーズの多様化、教員の多忙化などにより、幅広いジャンルでの訪問研修の充実が必要となってきた。訪問研修を通して望まれる、校内研究の活性化や学校の課題解決力の向上、学校支援機能の強化につながるものを作ろうと、所員が開発を続けている。

「ワークショップで進める授業研究会」は、教職研修課のユニットの一つである。年次研修などの講座で取り上げた時のレジメやアンケート結果を基に、他県のホームページや研究物も参考にしながら試案が作成された。平成22年度は、訪問研修のメニューには出さず、試行期間とし、ミドルステップアップ研修講座の1コマとして行った。また、希望があった学校や、研修会でも行った。平成23年度は、正式にメニューとされ、運用されている。

○研修ユニットの流れ

ユニット名：ワークショップで進める参加型授業研究会

内 容	1. アイスブレイク	6. ワークシートの種類と活用
	2. 校内授業研究会の実態	7. まとめ
	3. 授業研究会の役割	
	4. ワークショップ型のすすめ →流れの説明	
	5. 模擬体験 →DVD（授業名人）視聴、付箋による討議	

2～3では、校内授業研究会の現状と問題点について確認し、4で、ワークショップ型の説明をする。5では、実際の授業を使うには時間がないので、本研究所で作られた、授業名人の授業記録DVDの一部を使用している。6では、ワークシートの種類とその特性を説明している。

(1) 研修講座・訪問研修での試行

① ミドルステップアップ研修（校内研修の活性化）での試行（図1）

受講者の半数は、既に勤務校でワークショップ型を取り入れていた。また、福井大学教職大学院の修了生の先生を講師にした、「ワークショップ型授業研究会における研究」の講座を先に行ったので、内容に関連性があり、わかりやすかったようである。

事後のアンケートで出た感想・意見等を、「ワークショップ型研究会をまだ実施していない学校」と「実施している学校」に分けて集計した。



図1 研修の様子

まだ実施していない学校の先生の感想

- ・多くの先生方の意見が反映する。また、KJ法などで意見をまとめていく際にいろいろな視点が見えてくる。これは参加者の普段の授業にも生きていくものであると思う。一人ひとりがやろうとする意識が高まる研究会の方法ではないかと思う。
- ・ただ授業の感想を述べるだけではつまらないし、深まりもない。グループに分かれて生徒の活動の内容や動きを観察し、その良さや問題について協議するなど、研究に関する意見をどう出していけるか考えている。
- ・たくさんの意見が出され、また、文字にして残るので、参加者が理解やすい。したがって成果や課題の方向性が見えやすい。どのような意見も受け入れてもらえそうな雰囲気になると思う。
- ・昨年度から本校でも付箋紙を利用した授業研究を行っていますが、今後はぜひ、ワークショップ型の授業研究会に挑戦してみたいと思いました。書籍等で読んで知ってはいたのですが、実際に経験できたのがよかった。

「まだ実施していない」と答えた方のほとんどは、前向きにワークショップ型を取り入れることを考えたいという感想を書いていた。また、「意見を出すこと」から「深めていく」ことを求めていることに気付く。

実施している学校の先生の感想

- ・昨年度から取り入れており、話し合いは活発で良い雰囲気である。ファシリテーターがうまく進めないとポイントが絞れない。
- ・いろいろなやり方があると分かったので、状況に応じてやっていきたい。
- ・全員が自分の考えを自由に発言でき、非常に充実した研究会となっている。ワークシートや内容に少しずつ改善を加えながら、毎年ステップアップしていきたい。
- ・自分が研究授業をした時は、とても内容が濃く、自分が「まな板」にのっていないのに、授業の課題や、生徒の良い点を次々まとめて出して頂き、とても勉強になった。
- ・校内研修として、本年より数度取り入れられ、話し合いが持たれているが、フリーシート型のため、時間内には、出し合い、まとめるところで終わってしまっていて深めるまでに達していない。
- ・毎回ワークシートのパターンが同じだったので、次は少し変えてみたい。視点を決めておくのは、なかなか難しいです。
- ・研究会が、その後の授業(参観者)に生かしくい。

おおむね好評で、話し合いが活発になり、充実しているとの感想が多い。講座の中でワークシートの種類と、それぞれの利点、欠点をまとめて解説したことで、工夫をしたいと考える人もいた。

改善したい点としては、ファシリテーターの進行についてと、研究会で出てきた課題や成果の生かし方、視点の設定の仕方が挙げられている。

② 大野市研究主任会での試行

事前アンケート結果(市内小学校10校、中学校5校)

Q1 授業研究会はどのような形態か

- ・従来通り(全体会のみ) 6校(小学校4校 中学校2校)
- ・グループ討議→全体協議 7校(小学校4校 中学校3校)
- ・付箋の活用 2校(小学校2校)

Q2 ワークショップ型研究会の良い点、改善点

- ・グループ討議を始めると話が進む。
- ・グループ討議で深まってしまうと、全体討議の時間が足りなくなり、全体としての話し合いが深まらない。
- ・打合せ等、時間を確保することが難しい。
- ・学校が自ら効果的な校内研修を行うことにどうつなげていくか。
- ・短い時間でも充実した研修内容の工夫。

事後アンケートより

- ・ワークショップについて知ったことと、わずかな時間ですが体験できたことがよかった。
- ・本校でも研究会の持ち方をいろいろ工夫しています。研究会のたびに振り返りをして、次回の在り方を考えています。今回の研修を参考にさせていただきます。
- ・ワークショップ型の研究会を今日はさわりだけを行いました。もう少し進めて、グループ化・見出し等も経験できるとよかったと思います。
- ・校内授業研究会も同じように考えると、何だか自信というかなんとかなるように思えてきます。
- ・資料にあったことをDVDを見て体験できて、すごく分かりやすかった。

ここでも、研修(図2)は好評であった。ワークショップ型を使わずに意見交換ができていた学校

の先生方に対しても、DVDを用いて模擬体験できたことが、他の手法に目を向けるきっかけになったようだ。また、小規模校で、研究会では活発な意見交換が行われていると答えた先生も、「ワーク



図2 研修の様子

ショップはあまり関係ないと思っていましたが、意見が目に見えるよさ、残るところなど、今後取り入れてみたいと思った」との感想を寄せた。

平成23年度の授業研究会の様子を市指導主事に尋ねると、付箋を使ったワークショップ型を取り入れ始めた学校が増え、研究主任研修会で提案した通り実施していたとの答えが返ってきた。今までやってみたいと思っていた研究主任にとって、いい刺激になったようである。

4 研究協力校への支援と分析

大野市研究主任会の後、ある中学校の研究主任から、「うちの学校でもやってみたいのだけど」という相談を受けた。

その中学校は小規模校で、教員数も16人と少ない。年2回の指導主事訪問日に公開授業と授業研究会も行っており、会議の形式は、従来の形（授業者の反省→協議→ご高評）であった。研究主任に、なぜワークショップをやってみようと思ったのか聞くと、「いつもの研究会では、自分の専門とする教科以外はわからないという気持ちが強く、意見を言うことをためらうことがあった」と言う。以前から、ワークショップ型は知っており、「意見が出しやすいからいいな」とは思っていたようだ。研究主任会での教職研修課主任の話聞いて、「ワークショップ型なら、生徒の姿を中心にみることができると思い、やってみようという気持ちになった」と話してくれた。

支援として、この時点では、「資料提供」ができれば、ワークショップ型研究会は定着するのではないかと考えていた。

授業研究会の2週間前、学校で打合せをした。

- 最後のまとめ方と時間の調整の仕方について
→会議後、各自書いてもらい、後でまとめて通信として出す。
- 時間の調整
→キッチンタイマー等を使って、発表を制限する。
- ファシリテーションの方法や事前に内容やねらい、やり方を知らせる方法について、
→インターネットや関連本、先行研究資料等で使えそうなところを参考に、レジメを作る。
(職員会議や朝礼後に配付し、説明をしておく。)

後日、教職研修課から、以下のアドバイスを電話で伝えた。

- ・最初は欲張らない…最初からはうまくいかないと思わなくてはいけない。
- ・時間内に集約してまとめることはできないことを周知しておくこと。
- ・事前にやり方を広めておく。
- ・個人の振り返りは各自のメモを提出してもらった後、通信にしたり、そのまま貼り付けて回覧したりするやり方がある。
- ・やり方そのものの意見をもらっておくとよい。

「まずは、意見ができれば目標達成としよう」という話になったとき、研究主任の声が明るくなり、「がんばってみます」との声が返ってきた。

この研究主任は、昨年の人事異動で小学校から現任校に赴任した。研究主任という立場も初めてで、その上、2年生の学年主任にもなった。「中学校だから主任の仕事も大丈夫」と言われたが、なかなか自信がもてなかったようだ。年度当初、教育計画を作るにも、初めての学校、知らない地区で、考え

がまとまらなかったという。周りからいろいろ助けてもらい、今までやってきたことを中学校バージョンに考えて切り抜けてきた。他に教科研究部会の先生方はいるが、ほとんどの原案を研究主任が立てているので、新しいことを発案するにはとても勇気が必要であったようだ。気が重い様子だったが、校長や教頭、教務主任は、大変協力的で、「やりたいようにやってみなさい」というスタンスで、後押しがあるのが心強かった。

これを機に、協力をお願いし、研究主任と一緒に授業研究会の持ち方を探ることになった。

(1) 市指導主事訪問日(要請訪問) 授業研究会 (平成22年11月17日)

協議の柱：「教師の支援の仕方(教具の有効性：台本と付箋紙)」「生徒の学び合い」
研究会の流れ：協議会(60分)→授業者の振り返り(5分)→グループ協議(35分)→
グループの発表(10分)→まとめ

参加者の感想・意見

- ・正直、いつも何か言わなくては…という気持ちで参加していたが、リラックスした雰囲気の中で意見が言えるので、積極的に参加できた。
- ・みんなの意見や考え方、捉え方がよく伝わってきた。
- ・考えを深めていく流れが目に見えて、分かりやすかった。
- ・話題や論点が明確になり、課題等もつかみやすかった。
- ・本校でも実践を積み重ねていくことで、校内研究会のさらなるレベルアップが期待できる。

今回初めての「ワークショップ型」を取り入れた研究会ということで、とにかく、一人ひとりがたくさん話すことを目標としていた。その意味としては成功したと言える。個々の発言機会は通常の形態の何倍にも増えた。グループ内でお互いの経験や知恵を交流して学び合い、自分の授業の振り返りや授業改善への意欲につながることができたと考えられる。

研究会を終えて課題と感ずること

- ・グループ化するのは難しかった。
→**グループ毎に後はお任せ状態だったのですいません。事前説明不足だったと思います。**
- ・解決策を話していただけるだけの時間が欲しい
→**それだけ、グループでの協議が盛り上がり、解決策まで話し合う時間がなかったのだと思う。**
限られた時間を有効に使うため、ファシリテーターとして時間を区切れればよかったと反省している。
- ・協議の柱をもっと絞ったものにすると、方向性が見えやすくなるのでは。
→**協議の柱が長い文章だったので、わかりにくかったのでしょうか。テーマを常に念頭に置いて話し合えるような手立てが必要でした。** ※太字は研究主任のコメント

この研究会が終わった後、次年度の6月にある指導主事計画訪問にもワークショップ型を取り入れることを確認していたのだが、「計画訪問」であり、学校の今年度の学校の方針等を説明する時間も必要だということで、6月の研究会は従来型を採用することになった。

6月の公開授業は数学で、グループ活動として、方程式を取り入れていた。研究協議の協議の柱は「グループで話し合う課題は適当であったか」であったが、教具の指導法がまず討議の中心になった。数学科の教員中心の討議が、指導主事(国語科)の機転で話し合い活動に話題が移るまで続けられた。最後にまだ発言していない教員に発言を促し、協議は終了した。やはり今回の「従来型」では、専門性の必要な話題になり、「生徒の姿」が見えなくなる。頑張っただけで話題に参加しようとする教員もいたが、「自分が生徒の時はこう学習した」等の発言が出るのみで、深く追究することはできなかった。

どの参加者でも発言できるワークショップ型に11月の研究会は戻すことにした。昨年の研究会では「意見が出てくること」が目標で、おおむね達成されている。今回は、もう一歩進むことが必要であり、そのためには、教員全員が共通した研修で、生徒の見取り方や研究会の持ち方を理解するために、

訪問研修が必要だと考え、8月の現職研修に要請訪問を組み込むことを提案した。

(2) 現職研修 事前打ち合わせ（平成23年7月28日）

打ち合わせ前に、研究主任から内容についてのファックスを送ってもらった。

研修を実施する目的：教職員の資質や技量を高めるため

希望する内容：話し合い活動のすすめ方と最後のまとめ方

当日、教職研修課の主任が参加した。主任にとって初めての学校なので、まず教員や生徒、学校の雰囲気を研究主任から聞いた。その後、ワークショップ型を取り入れた研究会の様子や、その時の資料、プログラムを確認し、現状に沿う研修の流れについて打合せをした。

今回の研修の流れ

○今回は教師の話し合い活動に絞って、一つの形を提案する。

- ・グループ協議（付箋）はなし。ホワイトボードにまとめる。
- ・班での意見の発表の後、主任が感想を伝える。

(3) 現職研修（平成23年8月11日）（図3） 講師：教職研修課主任

授業研究会についての一提案

本日の提案

- ・従来型の授業研究会の利点と欠点
- ・授業研究会に求めること
- ・「こんな授業研究会はどうですか」
- ・グループ協議「意義と改善」
- ・協議事項発表
- ・全体協議（できれば） 当日のレジメより

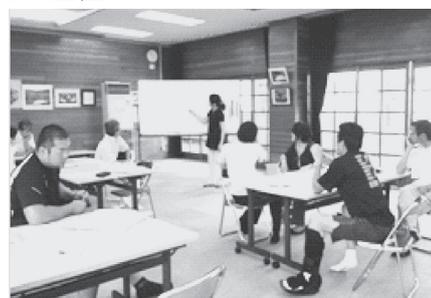


図3 研修の様子

グループからの意見

ワークショップ型でよい	改善したい
<ul style="list-style-type: none"> ・授業者の反省なし ・時系列でとらえていく ・教頭、校長、指導主事も同じ立場で ・最初からだれにでも付箋を分けておくとよい ・生徒のグループ編成をもとに教員も構成 ・自分が気付かないところも分かる ・あらかじめ参観する生徒（グループ）を決める ・研究会に参加しやすい (生徒の変容を見る構成なので) ・付箋紙を貼りつける台紙を指導案にするとまとめやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・助言は必要 →どうしても必要であれば行えばよいだろう ・授業者を見ている人は必要ではないか →生徒にスポットを当てることで、結局、授業者を見ていることになる ・授業者への評価（特に良いところ） →グループで話してもらい、報告の際に、「～も考えられたのではないか」というように伝える ・授業の観点についての扱いはどうするか →授業の観点自体は的を得ているか？ ・指導方法の改善としてぼやけて終わる事はないか？ (特に若い教師) →技術にこだわらなくてよい。まな板の鯉にしない <p>※太字は教職研修課主任からのコメント</p>

「指導方法の改善としてはどうか」との意見が出た。教職研修課主任からは「技術にこだわらなく

てよい」というコメントがあったが、この意見をもっている教員は多いと思う。従来型の研究会では、主に教科の指導法についてが中心議題になり、課題が浮き彫りになる。その課題について、批判とまではいかないが、いろいろな意見が出される。この形に慣れているので、研究会で鍛えられ、成長してきたと自負する教員も多い。話し合いの中で、改善方法も言ってくれるので、そのまま取り入れれば良いのである。

最初、研究会に指導方法についての話し合いがないのは、何か違和感があった。しかし、ワークショップ型では、従来の研究会を想定しての観点の設定ではいけない。研究テーマに沿った授業研究を全校でやっているのだから、授業者は自分の授業を通して、どのようにテーマを研究しているか話題を提供するのである。今までの「慣れ」を取り去らなくては、研究会が充実することはないのではないか。

この現職研修で、自校で行うワークショップ型授業研究会の姿がどの教員も見えてきたと思う。従来型の研究会との違いを知り、今まで感じてきた疑問もここでコメントをもらうことができた。どの教員も、今度もワークショップ型でと同じ思いをもっていて、結束も固くなった様子である。

この研修で出てきた意見と、昨年度の反省を参考に、次の授業研究会へ向けての方向性を考えた。

- ・次回はワークショップ型で行う。手法をもう一度確認する。付箋のまとめ方の例を配付しておく。
- ・指導主事や教科研究員も同じ立場で参加してもらう。→事前に連絡する
- ・協議の柱についての吟味。
- ・最初に協議の柱を確認する。
- ・参観するグループを作る。作り方は、生徒たちが関わりが深い教員を配置する。
- ・キッチンタイマーを使って時間を区切る。最後時間がなかったら、指導主事の先生に出てきた疑問について考えを述べてもらう。
- ・授業者の感想は後にする。
- ・ファシリテーターはグループ協議の結果のまとめをする。

当日までに2回学校で打ち合わせを設け、流し方の確認、協議の柱の確認、ワークシートの準備をし、研究会に備えた。

(4) 市指導主事訪問日(要請訪問) 授業研究会(平成23年11月14日)

研究主題	： 学び合い、豊かに自己実現を図る生徒の育成を目指して 一言語活動の充実を意識した場面づくり
公開授業	： 第2学年 理科 単元名 4 化学分子と原子・分子
協議の柱	： 生徒が意欲的に話し合い、的確な考察を導けるような発問であったか



図4 研究会の様子

今回は、話し合い活動の生徒のグループを見る教員を決めておいた。そのグループの生徒に接点が多い教員を配置し、研究討議の場でも同じグループで話し合った。

公開授業中、グループ活動が始まると、教員はそれぞれの班の周りに集まり、集中して生徒の表情や言葉等を見て、付箋に熱心に記入していた。従来型では、教室の後部や横にいる教員が多かったが、今回は誰もじっとしていることはなかった。

始まる前に、「ワークショップ型の授業研究会は苦手だ」と話していた先生も、付箋をもとに生徒の姿で気づいた点を出し、熱心に説明していた。これがワークショップのよさである。どのテーブルも、付箋のグループ化が上手くできていて、この手法に対する理解と慣れが感じられた。

事後のアンケートでも、意見が出しやすく、効果的であったと回答する教員が多かった。

1. ワークショップ型は今回の研究会に適していたか。

適していた 12名 無回答 1名

- ・ワークショップ形式の方が発言がしやすい。 ・生徒と同じ形態という意味でも適していた。
- ・多数の教員が参加する授業研究にはとても効果的だったと思った。
- ・視覚的にもよかった。意見を出しやすかった。
- ・いろいろな意見を出すことができ、短時間で中身の濃い話し合いができると思った。
- ・全体会形式ではなかなか出てこない意見や感想が出ていたのでよかったと思った。

養護教諭は、「授業についての意見を求められても困るが、子どもの観察となると、私にもできることはあるかと思う」という感想を寄せた。いろいろな立場で考えていけるのがこのワークショップのメリットである。また、全体会のような大勢の中では出てこない意見が、少人数のグループで出せることもメリットである。

2. 校内授業研究会で、課題だと思われることは何か。

- ・時間短縮ができるとよい。
 - ・指導主事や教科研究員もグループに入って、討議に加わってもらう方がよいかもしい。
- (校内研究会と教育委員会訪問の兼ね合いが難しいが)
- ・全員での話し合いや授業者への質問などが少なくなるので、グループでの話し合いをみんなで共有する場があるとよくなった。
 - ・時間の延長。キッチンタイマーをさらに有効に使う。

課題として残ったことは、「時間」「打ち合わせ」である。指導主事訪問日ということで、指導主事や教科研究員にも発言してもらったが、それぞれの時間が長くなり、終了時間を大幅に過ぎてしまった。研究主任は指導主事のグループ討議参加等を事前に打ち合わせする予定だったが、時間が合わなかったようだ。こちらの意図を確実に伝えられる、事前打ち合わせの大切さを強く感じた。電子メールやファックス等の手段も講じることも次回は検討する。

時間がなかったので、グループ討議での疑問点や課題を、指導主事、教科研究員に答えてもらった。しかし、授業者の振り返りのところで、「考察は基本的に文章で書くように指導しているが、考えが文章にならないこともあるし、言葉で表現することが苦手な生徒がいる。アウトプットの個人差を今からどうしていけばよいか」「力のある生徒たちが多いので、その生徒たちを伸ばしたい。どのように伸ばすか。」の2点が出てきていたが、そのことまで触れることができなかった。その結果、授業者は、不完全燃焼だと感じ、今回の授業研究会に不満をもったようだった。

研究主任に話を聞くと、あと15分くらいの余裕があれば、もう一度グループに返し、話し合うこともできたのではないかと考えたようである。しかし、授業研究会は1時間程しかないのが現状である。最初にワークショップ型を取り入れようとしたとき、教職研修課の主任から、「時間内に集約してまとめることはできないことを周知しておく」ことがアドバイスにあった。課題が残ったのなら、職員会議の後に少しずつ小出ししたり、通信で知らせるなど、工夫をして、共通理解する手立てを取ればよい。今回は、職員会議などで、授業者から出た二つの課題についてアンケートを行い、授業研究会の内容とともに通信に載せることにした。

12月に入ると、3年生の進路指導が始まり、通信がなかなかまとめられないとの話を受け、通信の例(図5)を作成して送った。

2 研究協力校での取り組みを通して

はじめの頃は、研究主任が必要としている情報を提供することが支援になると思っていたが、アドバイザー的な立場で接しているうちに、「研究主任と寄り添うこと」も大切であることがわかってきた。

研究主任の感想

アドバイザー的な立場で来ていただき、前回よりはレベルアップをというへんなプレッシャーがあり、不安でいっぱいでしたが、いつもそのたびに勇気をいただきました。途中でのワークショップ型でよいのかという不安には、その良さや趣旨を丁寧にお話していただき、回を追うごとに納得できました。ワークシートなどの手法についても情報をいただきました。終わった後、思ったようにファシリテーターとしてまとめられず、落ち込んでいるときに、「良かったよ」と声をかけてもらったとき、安堵感がありました。入っていただいてよかったと実感しています。

学校現場は多忙化、問題の多様化で、やらなくてはならないことが多くなり、やりたいと思っても時間がなくてできないことが多い。また、問題を抱えていても、そのままになることもある。その中で、アドバイザー的な存在があり、いつでも相談できる体制が整っていることは、研究主任にとって心強い。その時その時の学校で必要とされている情報や資料を提供することができ、訪問研修を取り入れてはどうかなどのアドバイスができた。稲垣（2007）は、行政の現状に触れ、「現場の仕事に触れ、参画し、一緒に問題を追究しながら、万策を考えて行く、そうした姿勢が求められる」としている。研究所、教育委員会等、支援する側にはこの姿勢が大切である。

この取り組みを通して、学校側が気軽に相談できる体制が所内にあるとよいのではないかと考えた。校内研修について何か情報を得たいときやどうすれば良いかわからない時、電話やファックス、電子メールで研究所員と気軽に相談できる体制である。その学校の現状に応じた情報提供やアドバイスが可能になり、場合によっては、学校を訪問することもあるだろう。この窓口があれば、要請訪問研修事後も継続的に支援することができ、よりよい成果が期待ができる。それぞれの学校に応じた支援の在り方が、これからの研究課題となるであろう。

最後に本研究の実施にあたり、御多忙の中、多大な御協力を賜りました、研究協力校研究主任をはじめ、教職員の方々に、厚く御礼申し上げます。

《引用文献》

- 中央教育審議会(2005)『我が国の高等教育の将来像(答申)』「第1章 新時代の高等教育と社会」
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/cyukyo0/toushin/05013101/002.htm)
- 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』p. 102
(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro-detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912/013.pdf)
- ちよんせいこ(2009)『学校が元気になるファシリテーター入門講座—15日で学ぶスキルとマインド—』解放出版社、p. 46
- 文部科学省(2011)『子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取組～』p. 102
(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23108/_icsFiles/afieldfile/2011/8/30/1310607/2.pdf)
- 堀公俊・加留部貴行(2010)『教育研修ファシリテーター』日本経済新聞出版社、pp. 14-15
- 稲垣忠彦(2007)「実践研究に基づいた成長への学びを」『月刊悠+ (はるかプラス) 4月号』ぎょうせい、p. 25

《参考文献》

- 科学技術・学術審議会 人材委員会(第41回)配付資料[参考資料1]『「知識基盤社会」について』
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/10/08061230/007.pdf)
- 中央教育審議会 教員の資質能力向上特別委員会(2011)『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上法策について(審議経過報告)』
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/cyukyuo11/sonota/_icsFiles/afieldfile/2011/02/16/1301982_1.pdf)
- 福井県教育委員会(2011)『福井県教育振興基本計画』
- 株式会社公文書店ホームページ 資料室 教育用語集『知識基盤社会』
(http://www.kobun.co.jp/dataroom/vocabulary/ta_12.html)
- 木原俊之(2006)『教師が磨き合う「学校研究」－授業力量の向上をめざして－』ぎょうせい
- 第20期協働研究第1回全国研究集会福井県大会(2010)『大会要項』
- ちよんせいこ(2010)『元気になる会議 ホワイトボードミーティングのすすめ方』解放出版社
- 中野民夫(2001)『ワークショップ－新しい創造の場』岩波新書
- 西村美貴穂(2011)『教員研修機関における研修・支援体制の充実』学校改革実践報告No.108、福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)
- 日本教育方法学会編(2009)『日本の授業研究－Lesson Study in Japan－授業研究の方法と形態(下巻)』学文社
- 堀公俊・加藤彰(2008)『ワークショップ・デザイン』日本経済新聞出版社
- ポーポー・プロダクション(2009)『人間関係に活かす! 使うための心理学』PHP研究所
- マジョリー・F・ヴァーカス・石丸正(1987)『非言語コミュニケーション』新潮社
- 村川雅弘編(2010)『実践ガイドブック・2「ワークショップ型校内研修」で学校が変わる学校を変える』教育開発研究所
- 村川雅弘(2005)『授業にいかす 教師がいきる ワorkshop型研修のすすめ』ぎょうせい
- 横浜市教育センター(2009)『授業力向上の鍵 ワorkshop方式で授業研究を活性化!』時事通信社